

都市景観形成における緑景観のあり方に関する研究

A study on greenery as a part of composition of townscape

代表研究者 大阪大学工学部環境工学科助手 久 隆 浩
Instructor, Dept. of Environmental Engineering, Fac. of Eng.,
Osaka Univ.
Takahiro Hisa

This study aims to consider how to cope with urban greenery as a composition of townscape. As land is used densely in the urban area, it is necessary to use small green space more effectively.

In this study, at first, tendency of preference to greenery was investigated. It is cleared that those who want to live in rural area tend to prefer dense green and those who want to live in urban area tend to prefer ornamental green.

On the other hand, through the survey on present condition of greenery in case of Osaka city, it is evident that consideration about design of greenery are not always sufficient.

The important thing in the improvement of greenery as a component of townscape is not how much green is there, but how good it is designed. Result of this study proposes that the evaluation of greenery must be changed from quantity evaluation to quality one.

研究目的

従来、都市の緑化に関する議論は数多くなされてきた。人工的な環境が卓越する都市空間において自然環境である緑の必要性には異論をはさむ余地はない。しかしながら、高密度な土地利用がなされる都市にあっては、人間活動に必要な諸施設、諸空間と、緑をはじめとする自然空間の間の相克が随所でみられる。

こうした状況を鑑みるに、重要な視点は、総合的な都市環境全体のなかでの緑のあり方を再考することであると考えられる。都市の中の緑に対しては、従来より緑地計画的側面からのアプローチが数多くなされているが、その多くは緑地中心の論調であり、都市環境の諸要素を総合的に視野にいれた研究は少ない。

以上の観点にたち、本研究では、おもに都市景観形成の側面から、景観を構成する諸要素の総体のなかでの緑の効用を評価、整理し、都市空間にふさわしい緑景観整備のあり方を考察しようとするを目的としている。本研究では、おもに緑景観に対する市民の指向を軸として考察を行う。

研究経過

研究では、主として二つの調査を行っている。

(I) 緑景観に対する人々の指向

ひとつは、緑景観に対する人々の指向調査である。調査は、平成2年12月に、留置アンケート方式(郵送配布、郵送回収)で行った。調査対象地区は、神戸市兵庫区(都心)、兵庫県宝塚市(郊外住宅地)、兵庫県川辺郡猪名川町(郊外住宅および農村)の3地区で、20歳以上の住民のなかから各340名ずつを無作為抽出した。回収票数は、合計293票であった。

1) 居住地指向の分析

アンケートでは、緑景観の指向にさきだって、居住地指向についてたずねた。これは、緑景観の指向と居住地指向の関連性を明らかにし、居住地環境整備の一環としての緑景観の整備のあり方を考察するためである。

居住地指向調査は、都心部から郊外、農山漁村にわたる、典型的な住宅地景観の写真を27枚用意し、それぞれの景観に対する嗜好を〈好き・どちらでもない・嫌い〉の3段階でたずねた。

分析では、まず、回答に基づいて住宅地の類型化を行った。〈好き・どちらでもない・嫌い〉の3段階の評価を順序尺度とみなし、回答の類似性をスピアマンの順位相関係数によって計算した。そして、相関係数を用いてクラスター分析を行い、住宅地の類型化を行った。分析の結果、「郊外集合住宅地」「都心集合住宅地」「郊外戸建て住宅地」「低層混在型住宅地」「農山漁村」「伝統的街並み」の六つのタイプに分けることができた。

また、人々の居住地指向は、次のプロセスで分析した。まず、先ほどの居住地の分類と同じく、〈好き・どちらでもない・嫌い〉の回答をもとにスピアマンの順位相関係数を求め、これを用いてクラスター分析を行い、居住地指向を求めた。分析の結果、次の五つの典型的な居住地指向が明らかとなった。なお、()内の数値は、それぞれの指向に属する人々の回答者全体に占める割合を示している。

① 伝統的住宅地・郊外住宅地指向派 (53%)
「農山漁村」や「伝統的街並み」「郊外戸建て住宅地」をおもに嗜好する人々である。

② 伝統的住宅地指向派 (18%)
「農山漁村」や「伝統的街並み」など伝統的な住宅地のみを好む人々である。

③ 混在型住宅地指向派 (8%)
「低層混在型住宅地」や「都心集合住宅地」のなかでもげたばきマンションが立地する場所など、住商混在型の住宅地を好む人々である。

④ 郊外戸建て住宅地指向派 (11%)
「郊外戸建て住宅地」を非常に強く好む人々である。

⑤ 集合住宅地指向派 (10%)
おもに「郊外集合住宅地」を好んでいる人々である。

2) 緑景観指向の分析

続いて、緑景観指向についてたずねた。この調査では、緑だけに限定せず、緑をもたない広場や水辺の風景を含んで、オープンスペース全般の指向のなかから緑景観指向を抽出することにつとめた。調査は、典型的なオープンスペースの景観写真を30枚呈示し、先ほどの居住地指向調査と同

じく、それぞれの景観に対する嗜好を〈好き・どちらでもない・嫌い〉の3段階でたずねた。

分析にあたっては、居住地指向調査と同じプロセスをとった。まず、景観の類型化を行うため、回答に基づいてスピアマンの順位相関係数を計算し、これを用いてクラスター分析によってオープンスペース景観を分類した。その結果、鎮守の森や緑蔭道のような緑がこんもりと茂った「緑繁茂型」、芝生や河原など開放感のある「芝地型」、低木や丈のある草が中心となっている「低木・草地型」、広場や遊歩道に緑が装飾要素として使われている「緑装飾型」、緑がほとんどないかあっても他の要素が卓越している「水辺・広場型」の五つに分けることができた。

また、人々の緑景観指向を、同様に分析した結果、次の五つの典型的な緑景観指向が明らかとなった。

① こんもりと茂った緑地を指向するタイプ (20%)
「緑繁茂型」のオープンスペースを好む人々である。

② 開放感のある緑地を指向するタイプ (32%)
芝生や河原など開放感のある「芝地型」のオープンスペースを好む人々である。

③ デザインされたオープンスペースを指向するタイプ (9%)
「水辺・広場型」の都会的でデザインされたオープンスペースを好む人々である。

④ 飾りとして緑が添えられているオープンスペースを指向するタイプ (24%)
「緑装飾型」をはじめ、人工的なものや自然的なものにかかわらず、緑のあるオープンスペースを好んでいる人々である。

⑤ 人間的な雰囲気を感じられるオープンスペースを指向するタイプ (15%)
鉢植えが並べられた路地の風景や、公園で人々が遊び回っている風景などを好んでいる人々である。空間そのものの質よりも、人間の活動が感じられるかどうかを重視している。

3) 居住地指向と緑景観指向の関連

さらに、居住地指向と緑景観指向、両者の関連

を分析した。居住地指向の五つのタイプと緑景観指向の五つのタイプのクロス表を作成し、分析を行った。その結果、次のような関連性がみられた。

① 「伝統的住宅地・郊外住宅地指向派」の人々は、緑のある景観を好む、特に「開放感のある緑地を指向するタイプ」の人が多い。

② 「伝統的住宅地指向派」の人々も、緑のある景観を好む人が多いが、「飾りとして緑が添えられているオープンスペースを指向するタイプ」が少なく、自然的で緑ゆたかな景観を指向する傾向がみられる。

③ 「混合型住宅地指向派」の人々には、「開放感のある緑地を指向するタイプ」と「飾りとして緑が添えられているオープンスペースを指向するタイプ」がある。こんもりと茂った緑に対しての指向はあまりない。

④ 「郊外戸建て住宅地指向派」の人々は、さまざまな緑景観指向がみられるが、「開放感のある緑地を指向するタイプ」の人々はみられない。比較的緑の量が多い場所を好んでいる傾向がみられる。

⑤ 「集合住宅地指向派」の人々の特徴は、「デザインされたオープンスペースを指向するタイプ」が最も多いことである。また、「飾りとして緑が添えられているオープンスペースを指向するタイプ」が次に多く、装飾装置としての緑を好んでいる傾向がある。

(2) 都市における緑景観の現況と評価

本研究におけるもう一つの調査は、都市における緑景観の現況調査である。調査地区として大阪市をとりあげ、地区レベルの緑景観の現状をおさえるために、阿倍野区（低層住宅地区・住商混在地区）、大正区（工業地区、高層住宅地区）、生野区（住工混在地区）、平野区（歴史的まちなみ、高層住宅地区）、中央区（業務地区）、北区（商業地区）において緑景観の悉皆調査を行った。分析にあたっては、撮影した景観写真をもとに、地区特性を勘案しながらそれぞれの景観の評価を行った。

都市内の緑は、大きく二つのタイプに分けることができる。一つは、公園や鎮守の森などある程

度の広がりをもち地域の緑景観の核となっているものである。そして、2番目は、玄関先に置かれた鉢植えやビルの足元の植え込みなど、小さなスペースを緑で装飾しているものである。

地域の緑景観の核となっている緑地の現状を、全般的に評価すると、都市内の高密度の解消としては、密植するよりも疎植を行い開放感をかもし出している方が景観的には効果的である場合が少なくない。また、緑の量はかりに気を使い、デザイン的な配慮があまりなされていないものもある。核となる緑地の現状の評価を、緑地の種類ごとに整理すると次のようなことがいえる。

① 地区公園、近隣公園、児童公園の緑景観

公園のデザインは全般的に画一的であり、景観的にはつまらないものになっている。公園ごとにもう少し景観の個性が欲しい。また、オープンスペースの広がりや公園のなかで行われている人々の活動を景観要素として活用するためには、疎植や中低木中心の植栽が望ましいと考えられるが、現状では、密植し過ぎて緑の壁をつくっているところもある。

② 公共施設敷地の緑景観

公共施設は比較的大きな敷地を有しており、そこに植栽がなされていると地域の緑景観の核として有効にはたっている。とりわけ、学校では、周囲に高木の植栽がなされているところが多い。

③ 社寺境内の緑景観

古木、巨木が多く地域の緑の核となる資質は持っているが、周囲をビルなどに囲まれ、景観として活かされていないものが多い。

④ 集合住宅園地、駐車場などの緑景観

集合住宅まわりのオープンスペースにも植栽が施されているところがあるが、建物が高層になるほど緑の量は減少する傾向がみられた。マンションよりアパートの方が緑の量は多いが、整然としているのはマンションの方である。

⑤ 水辺の緑

水辺に緑が植えられていると、水と緑が一体となって良好な景観をつくりだしているものが多い。

また、小スペースにおける緑の装飾として、ポ

ケットパーク、公開空地、低層住宅での庭や鉢植え、ビル緑化、まちなかに残る巨木、プランターやフラワーポットなどの緑を置く装置などの事例が収集できた。ちょっとしたスペースでも、工夫次第でゆたかな緑景観を創造することができる。

研究成果

以上の研究成果をまとめると次のようになる。

人々の緑景観指向をみると、都心や都市近郊を居住地として指向している人々は、こんもりとした緑よりも、飾りとして用いられる緑に対する指向が強いことがわかった。一方、都市の緑景観の現状を分析すると、量的な整備に注意が払われすぎ、デザインの配慮に欠けるものがすくなく存在していた。人々の景観指向からいえることは、都市に暮らす人々は、どれほどたくさんの緑があるかを問題にしているのではなく、緑がデザインのどのようによく使われているかを重視している、ということである。現状の緑整備の尺度は、緑地面積や緑被量、緑視量など、量的に計測されることが多いが、都市景観整備の一環として、効果的な緑の整備を考えると、デザイ

的な評価を中心に行う必要があるといえる。そうしたなかで、玄関先の鉢植えやビルの敷ぎわ緑化などの都市に特徴的な小さな緑整備の効果がきちんと評価されるべきである。

今後の課題と発展

本研究は、都市景観形成の一環として緑景観をどのように位置づけ、展開すべきかの糸口をさぐるための端緒の研究である。したがって、総括的、概略的になったことは否めない。そのなかで、都市における緑景観の整備にはデザインの配慮が必要なことが明らかとなったが、今後は、こういったデザインが景観的に望ましいのかを、より詳細に分析していく必要がある。この点に関しては、部分的には既存研究も存在し、それらの成果も取り入れながら、都市景観全体のなかでの緑景観整備のフレームづくりを行っていかねばならないであろう。

発表論文

「居住環境指向とライフスタイルの関連性に関する研究」、平成3年度日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系（平成3年5月）。